資料３　実践事例

(1)　事例１　発達障害があり、人とのかかわりに困難さを抱えるターミナル期の児童Ｂへの支援

病弱特別支援学校内および医療との連携によるチーム支援
（保護者支援・担任支援・チーム形態の変化）

①　現状

（略）

＊「ターミナル期」とは延命よりも身体的苦痛や精神的苦痛を軽減し、 QOLを高めることに　主眼を置いた看護が行われる時期のことを指す。

②　チーム支援に向けたコーディネーターの活動方針

発達障害からくるＢの困難さについて共通理解を図ることで、学校、病棟での支援者のより適切なかかわりを考え、Ｂのストレスを軽減し、充実した生活が送れるようにする。そのための各関係者の役割についてチームで検討する。

	考えられる役割	必要だと考えたこと	実施すること
学校	活動の制約が増えていく中で、Ｂの学習経験を広げる。楽しい体験を提供する。	授業者が抱える悩みを共有し、学部全体で、Ｂへのかかわり方のヒントを見つける。	支援会議 担任支援
医療	Ｂがストレスの少ない生活が送れるようにする。	看護師が抱える悩みを共有しながら、発達障害について理解を深め、Ｂへのかかわり方のヒントを見付ける。	支援会議
保護者	Ｂに対して受容的にかかわる。	保護者の悩みを聞き、対応できることを実践する。心理的な安定を図る。	保護者面談
それぞれの関係者をつなぎ、それぞれの検討事項をつなぐことで、Ｂへのかかわりの方針を統一する。支援者が互いに支え合いながらＢへの支援にあたる。			

③　具体的な支援に向けて

○　Ｂの一番身近な支援者である保護者の抱える悩みを共有し、支援の目標を検討する。

○　学校内でかかわる教員が抱える悩みを共有するとともに、うまくいっていることからかかわりのヒントを見つけ出し、日々の授業に生かす。

○　それぞれが実践する中でさらに情報共有し、支援について検討を重ねていく。

○　学校でのかかわりのヒントをもとに病棟スタッフと情報交換をし、Ｂの姿をより多面的に理解するとともに、発達障害についての理解を深めてもらいながら、より適切なかかわりを検討する。

④　実践の経過

〈保護者との面談〉 ９月10日

コーディネーターが保護者と面談し、悩み等を聞き取り、共有した。Ｂへの支援に対して希望することを確認する。

保護者から
（略）

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
これまでの思いを汲み、共感的に話を聞く。不安や悩みを共有する。	保護者は発達障害のことを周囲に「もっと理解してほしい」と訴えた。長い入院生活で医師や看護師など多くのスタッフがかかわってきた中で、さまざまなすれ違いが起きてきたことについて話すことができた。
担任と別に話を聞くことで、学校への要望等を聞くとともに、担任と保護者の信頼関係が深まるように対応に配慮する。また、担任の精神的負担を軽減する。	コーディネーターが保護者の悩みを聞くことで、担任一人が思いを抱える負担を軽減できた。それぞれの面談の内容を共有しながら、保護者の心情の理解に努めることができた。また、保護者の思いに応えられるよう、看護師との支援会議の実施について担任と検討し、直ちに調整に動いた。
関係者との関係が改善されるよう、実践したことによる成果を伝えていく。	実際に様々な関係者が、Ｂのことについて協議したことを伝えたことで、保護者の心理的な不安が少し軽減された。また、それにより不満や思いをさらに訴えてくれるようになった。

〈校内支援会議の実施〉9月14日　テーマ「Ｂへのかかわり方のヒントを見つけよう」

Ｂの実態について情報を収集し、特性の理解を図るとともに、授業者がＢとかかわる際のヒントを学部全体で考える。

参加者：学部教員　８名、　コーディネーター

方法：KJ法、ブレーンストーミング法

〈KJ法の結果〉

（略）

〈会議で確認したかかわりのヒント〉

・教材は、本人の興味を引きつけるものを２～３用意し、自己選択させる。
・制作についても材料に興味を持ちそうなものを数種類用意して選択させる。
・学習、生活の見通しが持てるように学習の流れをはじめに示す。活動の区切れを明確に示す。
・視覚的に示す。活動は「やってみせる。」
・言語での指示は短く。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
KJ法、ブレーンストーミング法を導入。事前に説明を参加者に配布しておくとともに、会議中はめあてを提示しておき、論点がそれないようにする。	限られた時間内での充実した支援会議が実現。多忙な中でも支援会議が実施できることがわかった。KJ法、ブレーンストーミング法を用いたことで、短時間で多くのアイディアを出すことができ、また、かかわりの少ない教員のチームへの参画意識が高まった。
「うまくいっていることからかかわりのヒントを考える」という方法で会議を進行する。	「意見を批判しない」というブレーンストーミングのルールにより、各自がそれぞれが抱えていた悩みを出しやすくなり、それらを共有し、Ｂとかかわっていない職員も情報を共有できた。また、「うまくいっていること」をヒントにしたことで、批判的な意見にならずに、具体的なアイディアがたくさん出された。
かかわりの少ない教員の意見も積極的に取り上げる。	かかわりが少ない教員でも、自分のこととして考えることができ、小グループでの発言が見られた。
出てきた意見を肯定的に受け止め、アイディアとして提示する。	会議途中からそれぞれが活発に意見を述べるようになり、参加者同士で様々なアイディアを生み出すことができた。

〈医療との連携　小児科看護師との支援会議の実施〉10月７日

学校、病棟でのＢの姿を情報共有しながら、発達障害について理解を進め、学校で考えたかかわりのヒントを伝える。看護師のかかわり方のよさについて知り、学校での指導に生かす。

参加者　小児科看護師　12名、担任、コーディネーター

学校でのＢの様子から	病棟でのＢの様子・看護師の対応等
○　学校の支援会議で出された意見を説明する。「やらない」「やめられない」「続かない」	・以前は回診でTVを観ていて、振り向かないなどがあった。今は少し改善された。
○　検査結果から「聴覚的な言語指示を理解することは苦手」「継次的な言語理解は苦手」「自己統制の弱さ」について説明する。	・「嫌だ。」と言うけれども、いやいや応じてくれるようにはなっている。以前は全くさせなかったこともあった。 ・「嫌でもやるんだよ。」と押し切ってやらせると本人はあきらめて応じることもある。 ・けんかになることもある。
○　校内支援会議から 「できない」時は「やることがわからない」「やり方がわからない」と考えた。知的な遅れはない。説明すると納得できることも多い。 うまくいっていることからかかわりのヒントを考えた。 ・指示は２つまでにする。 ・聴覚的な指示よりも実物を見せる。実際にやって見せる。 ・経験がＢの生活の支え。失敗経験でなく、成功経験を積ませたい。 ○　看護師のかかわりでうまくいっていることについて評価し、理論的な裏付けを補足 ・選択肢を与えたこと ・説明し、納得してから行うこと	○　病棟で実践したこと ・新しい治療の時には説明する。 ・薬についても説明する。 ・点滴の意味や注意事項も細かく説明したら、自分でその場所をかばうようになった。想像していたよりもわかる。 ・「○○と△△どっちにする？」と問いかけたら選択してできた。 ・嫌な経験は拒否が強くなるが、少し我慢できるようになっている。 ・痛みのスケールを使用したが、使えなかった。色で表すものに変えたら、使えるようになった。
○　話せてはいるが、言語化は苦手であることを伝える。 ・拒否を伝えられることは重要。 ・拒否の理由を言えるようになっている。 周囲が推測して言語化することで気持ちが楽になるのではないか。と思う。	・「嫌だ」は言う。 ・自分の要求は伝える。 ・看護師の都合を気遣って要求するようになっている。 ・理由を伝えてくれると対応しやすい。「痛いから体拭きは嫌だ。」と言えば、代案を提示できるなど。
○　感覚の過敏さ（視線、人との距離）について伝えた。	・以前実習生に対して「目の前に来るから嫌だ。」と言ったことがある。Ｂの困難さを意識していなかった。
エピソードをもとに語ることで、徐々に「そういえば～ことがありました。」などと、病棟での生活場面についてもＢの特性をとらえることができ、発言が増えた。支援会議の終わりには看護師から「いろいろ聞けて良かった。」「自分が接するときのことを振り返ってみた。」「そういえば選択肢があるときにはうまくできたと思い返した。」などと感想が述べられた。学校側も、今まで知らなかったＢの姿を知り、支援の参考になった。	

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
事前に医師と相談し、どのように会議を持つかを検討した上で、小児科師長、副師長に相談し、会議の参加者、方法等を協議する。	事前に関係者と協議をしたことで、看護師の勤務状況について情報を得られた。また、Ｂへのかかわり方についてあまり困難さを感じていないことがわかったが、その上で有意義な会議として受け止められるように、話題の絞り込みが副師長と検討された。「発達障害について基本的な事柄の伝達をしてほしい。」と依頼された。
看護師長、副師長と病棟看護師が出席しやすい日程を調整する。	副師長から「なるべく多くの看護師に聞いてもらいたい。」と要望が出され、そのために勤務状況を考慮した上で出席しやすい時間帯を検討してもらった。勤務がない看護師以外は全員が出席できた。
抵抗感を持たれないよう、情報交換の形で会議を進行する。	看護師が困難さを感じていない状況では、必要性を感じてもらえないのではと心配したが、情報交換という形にしたことで、病棟での様子についてたくさん意見を出してもらうことができた。
批判をしない形での会議の進行に配慮する。	看護師のかかわり方のよいところを取り上げて、Ｂの困難さの説明とそれに対する支援をヒントを挙げていくことで、抵抗なく受け入れてもらえた。Ｂの行動について、「そういうことだったんだ。」と理解を示す看護師の言葉が出ていた。
立場の違いを考慮した発言に心がける。	生活の場である病棟でのかかわりの難しさに共感しながら話すことで、看護師がＢとのかかわりの場面を積極的に発言してくれた。そこから、Ｂの気持ちや行動を説明することで、納得しながら聞いている様子が見られた。

これからの支援の参考になることに話題を絞った話合いにする。	短い時間での話合いであるので、論点がそれないようにコーディネーターが内容を整理しながら、進行を工夫する必要があった。子どもの様子について意見が多くなるので、支援の方法については学校での実践を担任に述べてもらうことで参考にしてもらえるように進めた。

〈医療との連携　　精神科医師との支援会議の実施〉10月22日

「発達障害について理解をしてほしい」という保護者の希望と「病状からも気持ちが不安定なので、支援してほしい」という病棟からの要望から精神科医師がＢとかかわることになった。Ｂへの理解を深めるために、学校での様子を情報提供するとともに、医師とのかかわりの様子も聞き、今後の方針を話し合う。学校の対応についても検討する。

参加者：精神科医師、学部主事、担任、コーディネーター

項　　目	内　　容
医師がかかわるときのＢの様子	・いつも変わらない様子でいる。様々な時間に会っているが、彼の活動に合わせて接している。
精神科医師への依頼	・病棟側からは「気持ちの荒れを何とかしたい」というものだった。保護者が「発達障害のことをもっと理解してほしい。」ということとは少しずれているだろう。 ・今後の病状の変化を考えると、Ｂがいつも我慢しているという状況は良くないことではないか。動けなくなって、看護師に依頼しないとできないことが多い。ストレスも高まる。
小児科での支援会議の様子	・Ｂの行動から、その意味を考えてもらう形で行った。その後の対応が変わったように感じている。 ・看護師の上手なかかわりも聞けた。私たちも参考になった。 ・Ｂの感覚の過敏さについては、医療的かかわりではやらなくてはいけないこともある。そこを考慮しながら、お互いがかかわりのヒントを探していきたい。
授業でのＢの様子	・コミュニケーションの困難さについては、理解してもらうことが非常に難しい。日常的にやりとりの中で誤解が生じたり、わがままととらえられてしまうことがある。本人に伝わっていないということを周囲がなかなか気づかない。本人のストレスが高まる。
保護者の希望の共有	・保護者の思いを受け止めることをお互いにやっていきながら、情報共有を図りたい。
今後について	・それぞれの立場の人が見るＢの姿は一部分。その行動の背景をお互いが連携して探っていくことは重要。それぞれのかかわりの隙間を埋めていければ、かかわるヒントも出てくる。
小児科病棟のスタッフへの啓発的活動について	・基本的理解については、医師の自分がやるべきことだった。今後、勉強会を行いながら、医師・看護師への啓発を行う。知識として知っていることでできることはある。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
医師の参加できる時間、場所に会議を設定する。	精神科病棟の面談室において行うことで多忙な医師のわずかな空き時間に会議を実施できた。医師も児童のことで学校関係者と直接話すことの必要性を感じていることがわかった。
保護者の要望を踏まえた内容に話題を絞って情報共有を図った。	精神科医師とＢの様子を共有できたことで、学校側がこれまでのかかわりについて自信を持つことができた。また、病棟スタッフへの啓発について医師も加わってくれることになり、新たなチームがチーム自体のサポートをする形態が生まれた。さらに、それらが新しいチームとして本人・保護者の支援を協働で行っていくことを確認できた。

〈担任への支援〉９月14日～11月12日　随時

病状が悪化している中で不安を感じている担任に対し､かかわりを工夫しているよさを評価し、自信を持って取り組めるようにする。また、授業の内容、方法についてともに考えることで、負担を軽減する。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
Bへの授業でのかかわりに関する相談にのり、直接授業を参観して、かかわりについてともに考える。	直接児童を観察しながら、支援方法や教材の工夫についてともに考えた。担任の意見を尊重し、共感しながらかかわることで、迷いを軽減できた。
ターミナル期の児童へかかわる精神的負担を軽減できるよう、いつでも話を聞けるような体制をとっておく。	病状が悪くなる中で、かかわる人数が減ってくると、担任への負担は大きくなる。できるだけ、児童の状態を見て、その困難さを共有することで、心理的な負担を軽減できた。
保護者や医師からの話を伝え、信頼関係ができていることを確認することで自信を持ってかかわれるようにする。	本当にこれでいいのかという不安が大きくなる中で、校内での目だけでなく、保護者や医療関係者の肯定的な声を伝えることで、担任の不安感を軽減できた。

⑤　まとめ

児童や保護者のニーズに応じ、その時々で様々なチーム形態が生まれた。それらが互いに影響し合いながら、より大きなチームとして、Ｂとその保護者を支援していくことができた。特にターミナル期の子どもを支える医療と学校がお互いを支え合いながら、支援をすすめることができた。さらに保護者も時に支援者としてチームの一員として機能した。コーディネーターはＢの困難さについて共通理解を図るため、各関係者の連絡調整を行い人と情報をつなぐ役割を担った。関係者が一堂に会して話す時間がとれないため、コーディネーターが情報を持ちまわる形で動いた。それぞれの信頼関係を構築できた。

(2)　事例２　発達障害があり、転出後1年で病状が悪化し、学校へ行くことを渋っている児童Ｃへの支援

転出後の G-NETによる他機関との連携
（医療との連携・外部機関との連携・保護者支援、チーム形態の変化）

①　現状

（略）

②　チーム支援に向けたコーディネーターの活動方針

G-NET会議において、現在のＣの様子について情報を共有し、どのような支援が可能であるか検討を行う。Ｃへの支援が適切に行われるために G-NET以外の外部機関の活用も検討し、それぞれが共通理解を図った上で、役割を分担しながら支援にあたる。

③　具体的な支援に向けて

○　医療関係者からの情報を収集し、Ｃや保護者の現在の様子を把握する。
○　保護者の意向をもとに、どのような支援が必要であるか G-NET会議において協議する。
○　必要に応じて、その他の外部機関と連携しながら、支援を実施する。

④ 実践の経過

〈医療との連携〉10月 7 日

通院治療を行っている医療機関から、現在の病状および保護者が希望していることについて情報を共有する。医療関係者は、保護者に今後の支援について他機関との連携を図ることの了承を得る。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
医師からの情報を収集し、現在の病状を把握し、支援の方法についてともに考える。	病状が悪化していることや、保護者が追い詰められている状況であることを知り、現在できる支援について検討を行うことができた。保護者支援が早急に必要と判断し、面談を計画した。

〈保護者支援〉10月17日

保護者の希望により、現在の困り感について相談を受ける。面談にあたっては、コーディネーターとともに信頼関係ができている病弱特別支援学校在籍時の担任との２名で対応し、保護者の悩みを共有する。

保護者から
（略）

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
以前の担任とともに保護者の悩みを共感的に聞き、共有する。	保護者が相談しやすいように、以前の担任とともに話を聞いた。現在困っていることについてその苦労に共感したことで、保護者は思いを吐き出し、少し気持ちを落ち着けることができた。不安に思っていることについて、言語化することでストレスの軽減になった。
話された本人の様子を特性と結びつけて共感することで、支援の方策を探る。	現在の行動が、入院中にも「こんな場面であった。」「こういうところで本人が苦しくて出ているのでは。」などという言葉によって、行動の理解を図ることができた。指導の方針について迷っていた部分も、行動の理由を考えることで、対応について自ら気づくような発言が見られた。また、保護者は生活の中で起こる一つ一つの困難さについて対応に迷ってしまうので、その疑問に答えてくれる相手を求めていることが分かった。
発達障害者支援センターと連携を図ることについて保護者に確認し、伝え合う内容についても確認する。	保護者は連携を希望し、伝える内容についても了承。支援者が増えたことについて少し安心感が生まれた。具体的な支援については、それぞれが役割を決めて検討することを伝えた。

〈他機関との連携：群馬県発達障害者支援センターとの情報共有〉10月10日

保護者が利用している発達障害者支援センターと連絡をとり、今後の連携を確認する。

保護者から話された困り感、その際に伝えたＣへの対応を伝える。数日後に相談が入っているとのことなので、そこで話される内容について後日、情報共有することを確認した。

〈G-NET〉10月10日

医師と連絡をとり病状を確認。保護者からの相談について報告する。医療は病気の症状の経過を見守るとともに、経過によっては発達障害への支援について、学校への対応を検討するということになった。地域資源を整理した。

〈他機関との連携　：群馬県発達障害者支援センターとの情報共有〉10月22日・30日

発達障害者支援センターで話された内容を聞き、前担任とコーディネーターが聞いた内容を伝える。ほぼ同様の内容であることが確認され、保護者の困り感を共有。
保護者が現担任の方針とこれまでの方針との間で迷ってしまっている状況である。Ｃが「学校に行きたくない。」と訴え、対応に苦慮し、疲労していることなどが共有された。 それぞれで保護者に話した対応について共通理解し、かかわりの方針を確認。
今後の役割については保護者からの相談を双方で平行して行っていくこと、学校への働きかけについて

は、発達障害者支援センター、地域の特別支援学校が担えるかを検討すること、方針の報告については発達障害者支援センターが行うことなどを確認。

〈他機関との連携　:特別支援学校との情報共有〉11月12日

保護者の了解のもと、児童の通う学校へ巡回相談に入っている特別支援学校のコーディネーターと連絡をとり、これまでの経緯や本人の様子などを伝えた。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
他機関の関係者と連絡を取り合い、その後の適応状況などについて情報共有を行う。それぞれの役割分担について協議し、協働支援を行う。	G-NET会議によって対応を検討し、各関係者との情報共有を図った。発達障害者支援センターとはまめに連絡を取り合うことで、保護者の不安にどちらかが寄り添えるようにした。学校に対しては、要望に応じて地域の特別支援学校が支援を行っていくことが適当との共通理解に至った。病弱特別支援学校においてはコーディネーターだけでなく、以前の担任も保護者のサポートに協力してもらうことで、多くの支援者によって支えられていることが示され、保護者の孤立感の軽減に効果があったと思われる。

⑤　まとめ

転出後の児童生徒について、それぞれが居住する地域で支援が継続されることが大切であるが、転出時の情報共有が継続されることの難しさを感じた。病気の子どもを一番近くで支えている保護者への支援については、転出後も病弱特別支援学校をはじめ、地域の様々な機関が連携しながら担っていくことが必要であろう。病気の子どもへの継続した支援のために、病弱特別支援学校で作成された「個別の教育支援計画」が活用されるように、在籍中、転出時に保護者や前籍校へ向けて情報発信することも必要である。本事例においては、転出時に連携をとっていたにもかかわらず、年度が変わったことで情報が途切れてしまったために、 G-NETを活用しながら再度ネットワークの構築が必要になった。病弱特別支援学校のコーディネーターが中心となって、ネットワークの再構築と新たな支援者の参加を促進できた。

(3)　事例３　病気のため入退院を繰り返しているが、学習上の困難さを抱え、今年度から特別支援学級に在籍している児童Dへの支援

病弱特別支援学校内でのチーム支援および前籍校との連携
（保護者支援、チーム形態の変化）

①　現状

（略）

②　チーム支援にに向けたコーディネーターの活動方針

学習上の困難さを抱えるDに対して、それぞれの教科での様子を共有することで支援の方法を見付ける。また、それを前籍校とも共有し、Dへの学習支援が継続して行われるようにする。

	役　　割	必要だと考えたこと	実施すること
病弱特別支援学校	Dの学習の実態把握と適切な支援の方法を共有し継続した支援を行う。	それぞれの教科での学習の様子を共有し、Dの困難さを明らかにする。それをもとに適切な支援の方法を検討する。	校内支援会議
前籍校		前籍校での学習の様子を聞き、本校での見立てと比較する。本校で検討された支援について伝え、前籍校での実践のヒントとする。	支援会議の実施

③　具体的な支援に向けて

○　Ｄの学習の様子から考えられる困難さやできることを整理する。

○　教科学習での適切な支援方法を検討する。

○　前籍校での学習の様子と照らし合わせながら、前籍校でできる学習に対する支援の方法を検討する。

④　実践の経過

〈保護者との面談〉９月14日

保護者が現在の様子をどのようにとらえ、何を望んでいるかを確認し、その思いに沿った目標への方策が考えられるようにする。

保護者から	コーディネーターから
（略）	（略）

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
担任外として話を聞くことで、保護者の支援者を増やす。	前籍校での学習の様子について保護者の立場でどのようにとらえているかを確認できた。
何度も入退院を繰り返していることを考慮し、病状に対する不安を受け止めながら話を聞く。	将来的な不安を共感しながら聞き、ともに考える姿勢を示したことで、退院後も継続して相談できることを保護者が確認でき、不安の軽減につながった。
学習面での不安については具体的に挙げてもらい、対応を提案する。	前籍校へ伝える内容について説明し、保護者の意向を確認した。指導方針についての確認ができた。また、現在学習として困っていることに対しては、具体的に対応を提案することで、保護者の不安を軽減できた。

〈校内支援会議の実施〉　10月21日　テーマ「Ｄの学習支援の方法を考えよう」

Ｄの困難さを共有し、学習指導の具体的支援方法を考えるため、各教科担当を中心とした校内支援会議を実施。

参加者：学部主事、学部教員５名、コーディネーター

Ｄの学習の様子	考えられる姿
【読むこと】　漢字が読めない。文末を変えて読んでしまう。スラスラ読めない。交互読みでは読む場所がわかる。	・記憶の容量が少ない。 ・視覚認知の困難さがないか。 ・気になるところに注目して、ほかの部分に注目しづらい。 ・長短がわからない ・情報が１対１対応で結びついているので、漢字を覚えてもほかの状況ではできない。 ・記憶の力は以前より伸びている。ただし、定着は難しい。 ・聞くことは得意。 ・やることがわかっていると取り組める。 ・読むこと書くことの困難さ ・漢字練習はやり方が変わらない。明確。 ・学習に対して抵抗感をあまり持っていない。意欲がある。 ・内容の読みとりは耳から。読んで内容をとらえることは難しい。 ・音読で交互読みができるのは、「。」を頼りにしているのではないか。　など
【かくこと】漢字練習を良くやっている。知っている漢字は書こうとする。漢字を書くときに横の線が増えてしまうことがある。ノートにバランス良く書くことができない。１マスに２文字を書くことができなかった。ひらがなを忘れてしまうことがある。長方形が正方形になってしまった。助詞の書き誤り。拗音の表記ができない。形をみて描写することが難しい。	
【体の動き】　ぎこちない。身体模倣が難しい。手先が不器用。家庭科で玉結びや針の糸通しができる。	
【気持ち】学習に対して意欲がある。自分で調べたいことややりたいことなどを伝えられる。	
【音楽】合奏で正しく入れる。	
【見ること】全体を見てとらえることができない。細かな部分に気づくことができる。	
【知識】ものの名前を知らない。覚えられない。	

話し合われた具体的支援　「これからの生活で生かせることを考えよう」

・意欲を尊重し、学習することが嫌にならないこと。
・聴覚情報をうまく活用する。音と結びつけることなど。
・漢字は読めればいい。かければもっといい。くらいの気持ちで。
・漢字練習で覚えられる訳ではないが、自信を持って取り組める活動であるので、きちんと書けていることを評価する。漢字を覚えることは別。
・少しずつではあるが定着もするので、その積み重ねを大切にする。以前は学習内容の２割定着を目標にして、次のステップへ進んだ。定着できるまでその課題にとどまることは本人の意欲を失わせる。学年相当の内容ができる部分もある。
・見ることの苦手さについては、注目してほしいところで声かけをして気づかせたり、見るべきところを指し示すなどの配慮があるといいのでは。
・理科の観察などでは「ここはどんな形かな？葉っぱは何枚あるかな？」などで視点をしぼる。
・漢字では線の色分けや一画ずつ示すなどでできることがある。定着している漢字との組み合わせで覚えることもできつつある。
・読みでは指で追っていくことも。
・内容をとらえるときは、文を読んであげて考えさせる。
・一度に複数の課題を与えない。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
時間を限定して支援会議を実施。事前にテーマ、会議の進め方等を説明したものを配布し、意見を持って支援会議に臨んでもらった。	時間を限定したこと、出席者に資料の準備等を求めないことで負担感を少なくすることができた。ただし、コーディネーターは本人の特性の理解につながるよう、過去の児童の様子について参考資料として準備した。事前に意見を用意して会議に臨んでもらうことにより、短時間でも充実した話合いになった。
前籍校への支援に生かせるよう、「前籍校で生かせる学習支援の工夫」をテーマとして設定する。	「定着できる部分が少ないとすれば、これからＤが生きていく上で必要な力を確実につけていくことを考えよう」という提案で内容を絞っていった。
支援会議でさらに小グループで考えてもらうことで会議の活性化を図った。	学習支援の具体的方法についてはあまり多くの意見が出なかった。そこでコーディネーターから特性を説明しながら、過去の実践を例に挙げてアイディアを提案した。それを参考に小グループで学習支援の方法を考える形をとったことで、一人一人の発言機会が増えいくつかの学習支援のヒントを提案できた。

〈算数担当者との情報交換〉10月21日

支援会議において、「算数」について検討できなかったため、前籍校との支援会議を前に「算数」の学習の様子を情報収集する。算数担当が指導で迷っている内容について考えられる手だてを提案し、次時の指導に生かせるようにする。

・そのときにできても、新しいことを学ぶために忘れることも必要。以前の学習が必要なときには、もう一度やってみることが必要。思い出してできることもあれば、また再び学び直す必要がある場合もある。
・かけ算九九は定着しているので、それを使ってできるものはたくさんある。
・２桁かける２桁、３桁・・・などは手順が多くなってしまうので難しい。その部分だけに注目できるような工夫が必要。昨年度は計算が終わったものを消していったり、０を書いて位をそろえたりなど

の工夫をしたが、３つ以上の工程を行うことは難しく、そうすると定着にはいかないのが現状。その単元内であれば、３工程以上でもできることがある。 ・例えば、桁数の多いかけ算が難しくても、１桁の割り算はできる。割り算の筆算のほうが、入るかもしれない。また、分数のかけ算のところもできる・・・など、本人の意欲を保ちながら、学習をすすめる。 ・数量概念がしっかりしていないので、計算の意味などは難しいが少しずつかけ算の意味などを理解している。計算と概念を結びつけることは難しい。やり方の習得はできるので、新しい計算を学びながら、概念形成は別に考えていく。 ・10のまとまりができない。序数の10であっても、十進法ではないのだろう。１年時は数量的に理解できるのは３までであった。５へのステップができているだろうか。 ・「分かった」「できた」を大切に。達成感を感じさせる課題を考えたい。 ・かけ算の意味が分かっていなかったが、「同じ数のものが何個かあるときにかけ算になる。」という説明で、次の時間には理解できていた。計算の方法を身につけた後で、意味を入れていくのもいいかもしれない。 ・10のまとまりになる組み合わせを算数カードで復習。少しずつ覚えられると良い。

〈支援会議の実施〉10月27日

Ｄの理解を共有し、学習指導の方針を確認し合うこと、さらに今後も連携してＤへの学習指導を継続させていくために、前籍校特別支援学級担任を交えた支援会議を実施。

参加者：前籍校担任、学部主事、コーディネーター

支援会議の結果をもとに病弱特別支援学校での様子を紹介	Ｄの「読むこと」「書くこと」の困難さについて（資料から）
前籍校での様子	・今年度から特別支援学級に籍を移した。通常学級ではＤが自信を持てずに、（音読などで）声を出さなくなったりしていたが、特別支援学級では大きな声で話し、音読もできている。 ・本人は意欲があり、まじめにきちっとやる。内容の読み取りは、３学年くらいの内容であればできる。見て書くことは難しい。 ・算数の文章題で、意味は全くとれていないで、問題文中のキーワードに着目させて、立式をしている ・保護者は普通高校進学を考えている。周囲にある公立高校、少し遠いが単位制の高校などもある。 ・今は漢字を辞書で調べる学習もしている。Ｄが分からないことを自分で調べて学ぶことは必要だと思う。電子辞書なども使えるように・・・。 ・算数でも電卓を使っている。計算のところが課題でない場合は、そこに負担をかけなくても良いと思う。何をねらっていくかで決めればよい。Ｄはまじめでこつこつやるが、依存心も強い。 ・自分だけでは難しいところや、分からないときに「人に聞く」ということは、必要なスキルだと思う。誤解していたり、分からないでそのままにして待っているということが以前は多かった。 ・大事なことをメモすることも必要だと思ってやっている。 ・Ｄは友達もいるので、通常学級での生活も大切にしている。国語、算数、社会以外は通常学級でやっている。特別支援学級でもとてもいい関係で友達と過ごせる。学習は難しいかもしれないけれども、すべて特別支援学級で過ごすのではもったいない気もする。
学習時の支援について	支援会議での意見をもとに具体的支援について提案
体調面での配慮について	・元気にしていて、急にがくっときてしまうことがある。宿泊学習でもそうだった。 ・宿泊学習ではキャンプファイアーで火を怖がることもあった。そうなると、なかなか声を聞き入れられない。そういう姿もある。 ・つい、見た目で元気なのでは・・・と思ってしまいがち。気をつけていきたい。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
支援会議でのファシリテーション	中立的立場での進行を心がけていたが、体調面についてなど内容によって、病弱特別支援学校としてお願いする部分になると、やや中立性にかける部分があった。前籍校の状況を踏まえ、その中で活かせる支援のヒントについて伝えることで、前籍校の担任と同じ立場で考えることができた。
校内委員会の結果を情報提供する。	校内支援会議の結果をもとに情報提供を行うことで、様々な角度からの学習の様子が提供できた。
前籍校担任の聞きたい内容を中心に話を進める。	前籍校・本校での様子を情報共有しながら、より具体的な実態把握に努めることができた。その中で、指導の方針が共有されていった。
保護者の希望（長期目標）と今後の生活（病状）を考慮した方針になるように進行する。	Ｄの進路を含めた将来の姿について共有することで、今後の支援に必要な事柄について、ともに考えることができた。保護者の思いを大切にしながらも、病気を抱えて生活していくという視点を加えることを提案することができた。
今後も転出入の可能性があるため、次回のスムーズな連携に向けて、継続して共に支援を考えていくことを確認する。	これまでの経緯からも再転入が考えられるが、今後も連携しながらかかわっていくことを確認できた。今回直接会って話ができたことで、前籍校担任は「次の機会には連絡がしやすい。」と次へつながることを期待していた。

⑤　まとめ

病気とともに学習に困難さを抱えるＤにとって、生活・学習両面についての様々な配慮が必要である。これまでも病弱特別支援学校から学習上の配慮や実践の経過を前籍校へ知らせてはきたが、直接会って情報を確認しながら協議したことはなかった。コーディネーターは細かな情報共有の必要性を感じ、その機会を設けたところ、一方通行の紙面の送付だけでは得られない情報の共有ができた。両者の関係ができたことで、今後の転出入においてもさらに支援の継続がしやすくなった。

(4)　事例４　病気で入退院を繰り返している児童Ｅが病気を抱えて通常の小学校で生活をしていくための支援

前籍校との連携（保護者支援）

①　現状

（略）

②　チーム支援に向けたコーディネーターの活動方針

病気についての理解や学校生活を送る上での配慮事項等について、病弱特別支援学校及び前籍校の双方であらためて確認し、できるだけ病状が安定している状態で過ごせるようにする。転出に向け、前籍校が病気の子どもを受け入れる不安の解消が図られるようにする。

③　具体的な支援に向けて

○　保護者に現在、前籍校へ引き継がれている病気についての情報や、配慮してほしいことなどを確認する。

○　医師に現在の病状と治療の経過、前籍校での生活について配慮事項等を確認する。

○　前籍校を訪問し、Ｅの前籍校での様子を聞いたり、病弱特別支援学校での様子を伝えたりする。また、病気の子どもを受け入れる不安を聞き取るとともに、「個別の教育支援計画」をもとに学校での生活で配慮すべきことを伝える。

④　実践の経過

〈保護者との面談〉10月29日

前回の転出後の様子を聞き取り、病気に対する本人のとらえ方や生活制限の様子を情報収集する。前籍校に伝えてある病気についての情報およびサポート訪問で協議する内容について確認する。

保護者から
（略）

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
前籍校での様子を保護者から聞き取り情報収集を行う。	保護者がＥの学校での様子をどのようにとらえているかを確認でき、前籍校へのアプローチの仕方に参考になった。
病気のことや配慮事項等学校側へ伝える内容について確認する。	医師の所見だけでなく、保護者の意向が含まれる場合があるため確認を行ったが、保護者が前籍校担任への信頼感を持っていることがわかり、内容については以前と変わりなくてよいということが確認できた。

〈医療との連携　主治医との打ち合わせ〉　　10月21日

前籍校へ伝える内容について、医療的な所見を主治医に確認する。学校生活で考えられる事柄について細かな部分を確認する。

参加者：小児科医師、学部主事、担任、コーディネーター

前籍校での配慮事項について
・服薬について ・感染予防について ・食事・飲み物の制限について ・紫外線対策について ・運動制限（運動管理区分とその他注意すること）　など

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
医師の予定に合わせた時間設定にする。	医師の予定に合わせることで、書面でなく直接会って話を聞くことができた。
前籍校での学校生活を具体的に想定して、医師へ質問することで、具体的対応を指示してもらう。	今後の学校生活を考え、具体的場面を挙げて質問したことで、細かな確認ができた。医師側が資料等を準備していなかったため、投薬のことなどが正確に確認できなかった。事前に話す内容を提示するなどの配慮が必要であった。退院が決まってからの打ち合わせであれば、「医師所見」を事前に記入していただき、それをもとに検討するという方法もよいのではないか。

〈前籍校との連携　サポート訪問の実施〉11月２日

病気を抱えながら学校生活を送る上で、生活制限を守ることや活動する際の配慮が必要である。日ごろの体調の変化に注意をして無理をしない生活を送ることが重要である。担任だけでなく養護教諭とも連携してＥの生活を見守っていくようにしたい。前籍校が病気の子どもを受け入れる際に、何を不安に思い、どんな情報を求めているかを知り、病弱特別支援学校としてできることを検討する。

項　　目	内　　容
「個別の教育支援計画」をもと	・登校の様子、学習内容、友達とのかかわり　など

に病弱特別支援学校での学習の様子	・体調面について
退院後の前籍校での様子	・一週間は午前のみの登校予定。 ・初日は不安だったようで、職員室に寄り、担任とともに教室へ向かった。すぐに友達が話しかけてきて安心した様子。
「個別の教育支援計画」をもとに前籍校での生活上の配慮事項について	・服薬について ・感染予防について ・食事・飲み物の制限について ・紫外線対策について ・運動制限（運動管理区分とその他注意すること） ・緊急時の対応　など
前籍校でのＥの様子	・保護者の話で、薬を一種類飲んでいない様子。 ・感染予防のマスクは着用していない。ムーンフェイスを気にしているので、「給食中だけ外すと余計に目立つから嫌だ。」という本人の希望による。 ・自分なりに活動を控えてはいる様子。 ・家庭での生活の様子が心配である。
病弱特別支援学校から	・感染予防にマスク着用が望ましいが、ムーンフェイスについては以前よりも気にしている。心理面のフォローも必要。今後はインフルエンザの流行も予想されるので、全体が予防のために着用になってくれば、抵抗はなくなるだろう。 ・服薬は重要であるが、飲みにくい薬であることも事実。必要性を学習していくことも必要だが、保健や家庭科などの中で、さりげなくやっていけると良いと思う。 ・疲労しやすいが、休むことはできるか。今後保健室での休憩が難しくなることもあるので、対応について保護者と確認できると良い。 ・運動制限などは変化するので、外来受診時を利用して、主治医に書面で尋ねるといいのではないか。細かな活動を書いて尋ねる方が、医師は判断しやすい。

コーディネーターの活動の工夫	考　　察
・参加メンバーを提案する。 **・会議でのファシリテーション**	・数年、同じ時期に入院していることから、体調面について担任だけでなく、養護教諭とも連携する必要があると判断し、会議参加を提案した。 ・前籍校でのＥの様子を知ることができた。
「個別の教育支援計画」について担任と内容の確認を行う。	・伝える内容については「個別の教育支援計画」をもとに事前に担任と打ち合わせておいたことで、必要な情報を漏らさず伝えることができた。
「個別の教育支援計画」をもとに前籍校での話合いを実施する。	・個別の教育支援計画が前籍校においても活用されるよう、資料として用いながら会議を進めた。それにより、担任のみでなく、養護教諭にも内容を確認してもらうことができた。
医療機関との連携の方法について具体的に提示する。	・病状による学校生活への影響場面は、前籍校側には想定が難しいことを考慮し、病弱特別支援学校側から具体的場面を挙げて、情報提供した。さらに今後も、学校生活上判断が必要なことが出てくることを考慮し、外来受診を利用して、主治医と連絡を取り合う方法について伝えた。具体的に方法を例示したことで、必要な場合にはすぐに活用してもらえるであろう。

⑤　まとめ

これまで数回の転出入を繰り返していたが､書類のやりとりと保護者の説明だけが行われていた。前籍校との共通理解の必要性を感じ、サポート訪問を行った結果、前籍校側が不安に思うことについて初めて確認できた。コーディネーターは特に通常の学級で過ごす病気の子どもについて、前籍校の立場に立って考えることが大切であり、その視点を校内でのコンサルテーションにも生かしていく必要がある。